

『地域の力』

全国協同集會基調講演の
大江正章さんに聞く

いま協同を拓く
2008全国集會
in新潟

新潟での全国協同集會(11月22、23日)で基調講演をされる大江正章さん(出版社「モンズ代表、ジャーナリスト」)に、著書のタイトルでもある『地域の力』を感じる様々な取り組みとそれを担う人々について、日本労働者協同組合連合会古谷直道理事長と協同総合研究所小橋暢之副理事長がお聞きしました(労働連合誌至)



大江正章(おおえ ただあき)さん
1957年神奈川県逗子市生まれ。早稲田大学政経学部卒業。9月にはNHKテレビ「地域発! どうする日本」に出演

本来的なありようや働き方が社会の主流に

どこへを自覚的に考え行動

古谷 私どもは、2年に1回、協同集會を開催し、今回で12回目になります。神戸で開いた前回から2年、時代の変化は極めて加速しています。人の絆や地域のコミュニティは崩壊し、地方自治体の財政は破綻、産業構造・労働体系は限界に達した。ある種の限界性を多くの人が感じ始めて、自分たちばかりに行き詰まり、このことを、本気で自覚的に考えて行動を開始した。これが、時代の特徴ではないかと思っています。

今回の集會の狙いは次の3点です。
①、地域社会や産業の新しいあり方、新しい働き方に関して、多様な活動をされている方々が全国から集まって交流し、より具体的に知り合っ

て、共通項を確認する。

②、そのような活動場面において、協同労働という働き方とワーク・コース・コープという事業・運動体がどのような意味を持ち、どのような可能性を持ち得るのかを検討する。

③、全国の運動が複合的にネットワークを組んで、より多面的・総合的に発展する方向性を確認する。

『地域の力』(食・農・まちづくり) (岩波書店)を読ませていただき、基調の講演をいただくには大江さんが最適ではないかとお願いした次第です。

新しい仕事への知恵をほしい

大江 『地域の力』は、もともと1月刊誌『世界』に1年半ぐらい断続的に連載したのですが、時代の特徴、ニーズという点については、ばくも古谷さんと全く同様に見ており

暮らしに根ざした仕事を発展させる

まして、そのことがこれを書いた大きな要因になっています。

いわゆる「小泉改革」で地域、特に地方の農山村はますます疲弊化していった。『世界』は、世の中のいろんな問題を取り上げて発信しているのですが、暗い話が多くて、読んでも元気が出ない。そのことは、編集者も実感していて、ぼくが「地方の農山村には新しい動きがあり、経済的には厳しくても、人々は結構元気だや」というような話をしたら、「そういうことを是非まとめて発信してほしい。それも、具体的な現場を通して語ってほしい」と言われた。

私も忙しくてなかなか取りかかることができなかったのですが、時代はますます悪くなり、これはちょっと腰を据えてやらなければならないと思いついて、05年の10月を皮切りに、全国いろんな所を歩いてメッセージを発信したわけです。

連載する「地方の自治体職員や議員さん、農山村で活動している人などからの反響が、そこそこありました。が、今年の2月に新書で出ると、誰もが驚くぐらいの反響を呼びまして、9月に5刷になりました。

ということは、こうした地域の取り組みを一つのモデルにして、自分たちの地域を何とか元気にしていきたい、と考えている人たちが全国にたくさんいるということでしょうし、もっと

第一次産業を大切に、第一次産業をベースとして、地域の中で、中規模や小規模の新しい仕事をつくり、雇用を生み出す知恵に学びたい、という欲求が非常に強かったのだらうと思っています。

「もうひとつ」ではなくて

ぼくは、「オルタナティブ」とか、「もうひとつの」ということを一つのキーワードにして、書いてきたつもりですが、最近「もうひとつ」という言い方をやめました。なぜならば、ぼくたちが目指すのも、皆さんが目指すものも、決して「もうひとつ」ではなくて、これは本来的なありようや働き方だと思ふからです。

そして今の日本はそれが社会のメインストリーム(中心的流れ)に少しずつ広がっていく時代を迎えている。つまり、これだけ厳しくなり、追い詰められたからこそ自分たちのやってきたことを見直そうという動きが始まっています。

特に20代、30代の若い人たちが話すとか、かなり多くの人たちが「大量生産・大量消費・大量廃棄の、見かけの成長」というものは嘘だ、それは地球環境が決して許してはくれない、ということを実感し、認識している。

だから、ある意味、今は絶好のチャンス。の時期だと思つて、若い人たちに期待しながら新しい地域づくりを担っていく仕組みを自分も考えていきたい。また、そうしたこと考えている人、また、皆さんのような取り組みにはとても共感を持っています。

地域へのこだわりがプラスの価値持つ時代

共通項が明らかになった

小橋 『地域の力』の中で紹介されている取り組みには、4つの普遍的な共通項があらわですね。

地域の資源を活かし、それに新たな光を当てていること。地域に根付いた

協同集會、多数ご参加を 大江さんと話して

古谷理事長



グローバル化の崩壊は世界中で、生活と地域に根ざした活動を自覚させる活動。世界金融危機の嵐さへ、地域の力が発揮されるチャンスとなる。そして、沸き起こりつつある『地域の力』すなわち、地域の再生に向かつて立ち上がる人たちの活動という「協同労働」という働き方と、その協同組合が、一つの有効な受け皿として共感を受けつつ登場しようとしている。協同集會に多くの人々の参加を呼びかけた。

が、様々な取り組みを、幅広いスタイルでやっているところを取り上げよう、といういろいろみていく中で、地域資源を活かし、それに新たな光を当てて、暮らしに根ざした中小規模の仕事を開発させているという共通項が明らかになったのです。

たとえば、第1章で取り上げた、鳥根の奥出雲地域にある農民たちがつくった乳業会社「木沢乳業」へ出荷する酪農家は、規模でいえば牛の飼養頭数1戸平均35頭、日本の平均の半分強です。そして輸入飼料のみに頼らず、地域でも調達できる稲ワラや牧草を餌として重視している。

単に牛を飼つて、お乳を搾つてそれをメーカーに出す。これでは、乳業メーカーの隷属的存在にしかならないわけですが、自分たちで工場をつ

くって低温殺菌牛乳を出荷し、チーズやアイスクリームなどの加工も行う。そして、それを自分たちの手で共同購入グループを中心に、スーパーやデパートなどにも広める。原料のほとんどは自分たちの地域のもので、それを加工することによって仕事が増えているわけだ。従業員は90人になり、売上は1980年の6億円から2006年の約16億円にまで伸びています。

これは完全な地域産業です。しかも、量ではなく、質を重視したものをとっているから、1つ1つの単価は高い。高いけれども、その作り方と味を理解して消費する人がいる。不幸なことです。が、ヨーサ事件に端を発して、食の安全性の問題が噴出して、います。事故米の問題もそうですが、こうしたことは、これからも続いていくと思います。

その中で、多くの消費者たちが、自分たちの食べ方ということに目を向けるようになりはじめています。そうしたものに焦点を当てた生業仕事が開成り立つ余地は、これからずっと増えていくだろうと思います。

これまで「グローバル化」が言われてきましたが、地域にこだわることがプラスの価値を持つて人々に伝わっていく、こういう時代になってきた、非常に思っています。

少数でも頑張る人いれば変わる

古谷 『地域の力』の中に、地方自治体の人たちの中に、何とか地域の第一次産業を盛り立てようとしている人たちがたくさんあります。

大江 一部の大都市を除けば、地域の自治体の職員は、大半が「自分たちの職場」暮らししている所でもあるのです。つまり、自治体職員であると共に、地域住民である。このことが、国の官僚とは大きな違いです。

国の官僚は、ほぼ2年に1回ずついるような所に動きます。自治体職員の方々が、それぞれの仕事に精通していき、暮らし、地域の現実を見ているからこ

そのままであったというところから、肌で分かる。たとえ、地方の商店でお金を使う人の多くは、第一次産業に関わっている人です。つまり農業を始めとする第一次産業が崩壊するということは、そのままだ地域経済の崩壊につながる。そういったことも自治体職員は見ているから、何とか「新しい道」を農林漁業をベースにしていこうと試みている。面白いのは、頑張る人が少数でも変わる、ということ。すくなくとも、村に言えば、2、3000人規模の町村だったら、そういう人が2人いて、その人たちが応援する首長がいれば、充分変わります。

よそ者が地方に来る時代
小橋 そうした地域のリーダー像というのは？
大江 仕事や立場はいろいろですが、多くの場合、一度外に出ています。何年か都会で仕事をし、ふるさとの良さが改めて分かる。そういう経験が、ふるさとに戻ってきて、自分たちの地域を見直し、いく大きな原動力になっている。



古谷直道（ふたな）さん
日本労働者協同組合
連合会理事長

自分たちの環境への思いをアピールしています。興味を持った学生たちがワーキングホリデーみたいな形で一週間とか訪れる。そこで、たとえば、棚田なら棚田に惚れて、風景に惚れて、人々に惚れて、何か仕事があったらそこで生きていきたいとなるわけです。年をとるまで30年、50年いるかどうかは分かりませんが、とりあえず、仕事があるところは何人かの若者が、少なくとも何年間かはいます。若者が来る、ここが地域は活性化します。特に若い女の子が来ると、おっちゃんたちは大喜びします。みんな親切になります。やっぱり、町は元気になってくるんですね。

そういう若い子たちは発信能力があります。自分たちのホームページやブログで、その地域の魅力を伝え、またそれが、友達を夏休みと呼んできたりします。

農山村でもNPOの出番増える
古谷 ノーターンもあり得ます。出て行ったけれど、完全に去るならはして、連絡をとれば、ふるさとして、このような人たちが、ふるさとで穫れた農作物やその加工品あるいは、そこで面白い話、悲しい話を伝えることで広がる可能性がある。大江 実際にそういう動きが出ています。島根県の旧羽須美村、現鹿野町という所ですが、中国山地の山の中で、広島県境に近い。ここにひろしまねという面白いNPOがあるのです。名前の通り、広島と島根のことをやる。

地域資源活かし、新たな光を当て



古谷直道（ふたな）さん
日本労働者協同組合
連合会理事長

その人たちが、「地元の田んぼでお米をつくったら少々高くても買いますか」と、村出身者でつくる東京と関西の組織に呼びかけたら、かなりの数で「それは是非とりたたい」という反響が返ってきて、耕作放棄になっていた田んぼでお米をつくることになったのです。

そういう仕組みづくりを、NPOのリーダーが中心になってやる。町役場とも良好な関係を持っていますので、役場も多少の応援はする。

そうすると、今まで荒れていた田んぼがよみがえり、ノーターンの人にお米が届けられ、そのお米が、野菜を付けた山菜を付けたら、このお米が、その中からノーターンが出てくるだろうと思っているのです。

小橋 そのNPOを主宰している方は、地元出身の人ですか？
大江 地元出身のノーターンです。大学進学で東京に出て、27、8まで東京でいくつかの仕事をしました。そのひとつは国会議員秘書です。戻ってきて、最初は旧羽須美村の村役場の職員を15年くらいやったの。それで役所では限界がある。だから、自分は地域のために活動したい、NPOをつくった。

古谷 労働というのは、物、あるいはサービスを生産するということが、他に、交換価値を生産するわけですが、さらに人の絆を生産し、持続可能な生態系と地域社会を生産する。そういった総合生産性を考えて労働力の流れをコントロールする必要があると思うのですが、その辺は？
大江 ばくも、生産性の再定義というのを考えました。人と人とがどうやって豊かな関係性を取り結んでいくかというのを、生産性の中に組み込んでいかないと、働かされ過ぎて死んでしまふ、自殺をしてしまふようなことも起こる。こんなひどい状況って、諸外国にはほとんどないじゃないですか。

古谷 具体的な事例、そして、そこから見えてくる展望について、協同組合でたっぷりお聞きしたい。今日はどうもありがとうございます。『地域の方について』の小橋さんの書評を前号に掲載しました。

自主的・自律的に形づくる「新しい公共」

「モンズ」は「公共」の「共」

古谷 大江さんは「モンズ」という名の出版社の代表をまとめておられますが、モンズとは何か、分かりやすくお話しいただけますか？
大江 日本では「公共」という言葉があるが、「公」と「共」は随分違う。「公」はやっぱり役所がずっと独占してきたものです。そこに市民が参加する」といっても、あくまで主体は役所なのです。

でも「共」は、もともと人々が自主的・自律的な話し合いのもとで形づくってきた世界で、それがモンズです。一番典型的なのは、入会権です。本の中で紹介している練馬区の農

業体験農園の農地は、農家の私有地です。しかし、その私有地に、平気で百何十人も人が毎週入ってきて耕すわけです。そうすると、その場所はいまの土地になり、さらに、新しい人と人との関係性を生み出すコミュニティになっているわけですね。これは現代の入会地といえるでしょう。

古谷 具体的な事例、そして、そこから見えてくる展望について、協同組合でたっぷりお聞きしたい。今日はどうもありがとうございます。『地域の方について』の小橋さんの書評を前号に掲載しました。

「新たな豊かさ」の10の指標

- ① 地域におけるNGOやNPOの数の多さ。
- ② 家庭菜園・市民農園などで、食べ物の一部を自給する人々の比率の高さ。
- ③ 施設ではなく、地域で暮らす障がい者の比率の高さ。
- ④ 寝たきり老人の比率の低さ。
- ⑤ 職種の多さ。言い換えれば、特定企業に雇用される人々の比率の少なさ。
- ⑥ 移動における公共交通・自転車利用者の高さ。
- ⑦ エネルギー・消費における自然エネルギーの比率の高さ。
- ⑧ 人口におけるノーターン者の比率の高さ。
- ⑨ 全国展開のスーパーやコンビニでの購買金額の少なさ。
- ⑩ 地域金融機関・信用金庫・労働金庫、NPOバンク等の預金率の高さ。

古谷 具体的な事例、そして、そこから見えてくる展望について、協同組合でたっぷりお聞きしたい。今日はどうもありがとうございます。『地域の方について』の小橋さんの書評を前号に掲載しました。